

群 教 セ	G09 - 02
	平 14.207集

英語を使って積極的に表現しようとする 態度を育てる指導の工夫

- 身近な題材を紹介する活動を通して -

特別研修員 井戸 健二 (館林市立第一中学校)

《研究の概要》

本研究は、身近な題材を紹介する活動を行い、英語を使って積極的に表現しようとする生徒の育成を目指したものである。まず、簡単に表現できる身近な題材の紹介活動をペアで行う。次に、紹介に工夫を要する身近な題材の紹介活動をグループで行っていく。最後に、ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文を参考にしてスキットを作って発表することにより、英語を使って積極的に表現しようとする生徒の育成を図った。

【キーワード：英語 - 中 紹介活動 身近な題材 積極的に表現 クイズ活動 スキット】

主題設定の理由

国際化が急速に進む社会情勢の中で、国際交流の機会がますます増加し、外国語で意思の疎通ができる人間の育成が求められてきている。また今年度から本格実施された中学校学習指導要領では、話すこと及び聞くことの活動の指導に重点を置きながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を基本方針の一つとしている。これらの点を踏まえると、これからの国際社会を自らの力で生き抜いていく生徒にとって、外国の人たちと進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けることは大切である。そして、このような態度を育成するためには、まず、生徒が慣れ親しんでいる身近なものについて英語を使って表現する力を身に付けるようにする必要があると考える。

さて、本研究対象生徒の実態を調べてみると、「英語をどんどん話せるようになりたい」と多くの生徒が英語に興味をもっていることが分かる。一方で、英語の学習への興味が薄らいで、英語を話すことに消極的になりつつある生徒がいるのも実情である。こうした生徒についても、自分たちが慣れ親しんでいるものを英語を使って表現することの楽しさを実感できるようにすれば、英語に対する苦手意識も少なくなっていくであろうと考える。

これまでの英語の授業では、新出表現を使った会話練習を数多く授業に取り入れてきた。しかし、会話練習が創作的ではなく、生徒の興味、関心を引き出すような表現活動にならないところがあった。また学習形態において、一斉指導の場が多くなりがちであり、生徒同士で、お互いのよさを認め合いながら表現方法を高めていく場が不足していた。さらに、単語や語句、構文等を正確に用いて表現することを重要視する傾向もあった。

そこで、本研究では、自分たちが慣れ親しんでいる身近な題材を取り上げ、英語ではどのように表現するのか、また、その様子を外国の中学生に伝えるとしたらどう表現すれば分かりやすいのか等について、生徒自ら考え、発表する活動や友達同士で学び合う活動を工夫して行っていくことにする。そして、小さな間違いを気にせずに、身近な題材について、英語を使って積極的に表現しようとする態度を育成していきたいと考える。

具体的な本研究の取組は、まず、簡単に表現できる身近な題材、次に紹介に工夫を要する身近な題材を取り上げ、クイズ的要素を取り入れながら紹介活動を行う。さらに、これらの紹介

活動の中で作った英文をスキットにして、相互評価を取り入れながら、全体の前で発表する。そして、これらの紹介活動をオーストラリアの姉妹都市の中学校に学校紹介として送るために、ビデオに記録するようにする。このように身近な題材を紹介する活動の工夫を通して、英語を使って積極的に表現しようとする態度を育成できると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

英語を話す活動において、身近な題材を紹介する活動に取り組むことにより、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育つことを明らかにする。

研究の見通し

- 1 「導入」の過程において、簡単に表現できる身近な題材を取り上げ、ペアで紹介活動を行うことにより、身近な題材を英語を使って表現することに興味をもち、英語を話してみようとするであろう。
- 2 「思考」の過程において、紹介に工夫を要する身近な題材を取り上げ、グループで紹介活動を行うことにより、英語を使ってやりとりをする面白さに気づき、英語を使って表現することに意欲をもつであろう。
- 3 「まとめ」の過程において、ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文を参考にして、スキットを作って発表することにより、成就感をもち、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育成できるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 英語を使って積極的に表現しようとする態度について

「英語を使って積極的に表現しようとする態度」とは、学習した言語材料を使って、自分の身近な題材について、相手に分かりやすい英語の表現をジェスチャーを用いる等して、小さな間違いを気にせず、表現する喜びを感じながら、進んで話そうとする態度ととらえた。

本研究において、英語を使って積極的に表現しようとする態度を身につけようとする生徒像は以下のような生徒である。

- ・ 簡単に表現できる身近な題材を取り上げ、ペアで紹介活動を行うことにより、身近な題材を英語を使って表現することに興味をもち、英語を話してみようとする生徒。
- ・ 紹介に工夫を要する身近な題材を取り上げ、グループで紹介活動を行うことにより、英語を使って自分の考えや友達の考えをやりとりをする面白さに気づき、表現したいものについてどんな英語を使えばいいのかを考え、表現する意欲をもつことができる生徒。
- ・ ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文をスキットにして発表することにより、成就感が得られる生徒。

(2) 身近な題材を紹介する活動について

身近な題材を取り入れた理由は、生徒が慣れ親しんでいるものであれば、生徒にとって分かりやすいため、積極的に紹介してみようという姿勢をもつであろうと考えたからである。中学1年生という段階を考えた場合、英語の運用面では教師の援助・支援が必要となる点もあるで

あろうが、身近な題材であれば、ジェスチャーを用いる等して、英語を使って表現ができると思われる。

「簡単に表現できる身近な題材」とは、家族や友人、また学校の先生等、生徒が日ごろ接している身近な人物ととらえる。慣れ親しんでいる人物の特徴であれば、簡単な表現で表すことができるからである。その際、「語彙」「基本文例」「つなぎ言葉」「スキット例」をまとめた「英語基本表現集」を活用し、簡単な英文を作り、「英文紹介カード」に記入する。次にその「英文紹介カード」を使ったクイズ活動をペアで行うことで、生徒は身近な題材を英語を使って表現することに興味をもち、英語を話してみようとすると考え。また、「紹介に工夫を要する身近な題材」とは、カバンやペン等、生徒が日ごろ使っている身の回りのものや授業、給食等、生徒が日ごろ慣れ親しんでいるものととらえる。身近なものを分かりやすく表現するためには工夫された英文が必要となるからである。その際、各グループごとに「英語基本表現集」を活用して英文を作り、「英文紹介カード」に記入する。次に、その「英文紹介カード」を使ったクイズ活動をグループで行うことで、生徒は英語を使って自分の考えや友達の考えをやりとりする面白さに気づき、英語を使って表現することに意欲をもつと考える。クイズ活動を行う際には、解答を導き出すヒントの出し方に工夫をして、生徒たちの興味を深められるようにする。そして、まとめとして、ペアやグループで紹介した英文や「英語基本表現集」を活用してスキット作りを行い、学校生活という身近な題材を紹介していく。生徒は2学期の初めに教科書でアメリカの学校生活について学んだり、学校の掲示板でオーストラリアの学校生活について知ったりするので、自分たちの学校生活を紹介することに興味をもつと考えたからである。紹介する学校生活の具体的な場面としては、先生や授業、部活動、清掃や給食の活動等について取り上げ、相手に分かってもらえるように、紹介文を構成して、スキット作りをしていく。

・ 思考の過程におけるヒントの出し方の工夫

ヒントの文を三つ作る。第1ヒントは "I use this when I play baseball."のような、それが何なのか大まかな内容を示す文にする。第2ヒントは "I can catch a ball with this."のような、その特徴を示すような文にする。第3ヒントは "This has five or two fingers."のような、それを聞けば答えが分かるような文にする。このようにして、答えが絞られるようにする。それぞれのヒント後に "What is this ?" で聞き手に質問する。ヒントの出し方については、難しい単語や表現を用いる代わりに、解答者が分かるようにし、ジェスチャーも加えたりする。

(3) 英文紹介カードについて

英文紹介カードは、主に紹介しようとする身近な人物やものの名前とそれを紹介するためのヒントとなる英文を書ける形式になっている。英文紹介カードを利用する理由としては、紹介文を効率よく作成できる、作成した紹介文を整理しやすい、整理した紹介文をペアやグループ内の紹介活動での表現活動に参考にできる、等がある。「導入」の過程、「思考」の過程で書いた英文紹介カードの英文を、「まとめ」の過程でスキット作りをする際に、参考にできるようにする。

(4) 英語基本表現集について

「英語基本表現集」は主に「語彙」「基本文例」「つなぎ言葉」「スキット例」の四つの内容から構成されていて、ペアやグループでの紹介活動やスキット作りを行う時に使う。「語彙」には、身近な人物や、生徒が日ごろ使っている身の回りのものや慣れ親しんでいるものを紹介したり、学校紹介をしたりしていく時に必要な単語がまとめられている。「基本文例」には、これまで生徒が学んできた be 動詞や一般動詞を含む文、年齢や出身地、好みや特技等、人物を紹介する時によく使われる表現や、未習であっても自分と紹介する人物を比べるための比較等、使用頻度の高い表現がまとめられている。「つなぎ言葉」には、"Well"や"Let me see"等、会話と会話をつなぐ表現がまとめられている。「スキット例」には、先生や教室紹介、清掃活動をテーマにしたスキットの例が載っており、生徒のスキット作りの参考になるようにする。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

期 間	平成 14 年 10 月下旬 ~ 11 月上旬	題材名	自分たちの学校を紹介しよう
対 象	館林市立第一中学校 1 年 3 組 男子 18 名 女子 18 名 計 36 名		

(2) 抽出生徒について

A 男	言語材料への理解力はあるが、学習した言語材料を使って表現することを苦手としている。紹介活動を通して英語学習に積極的に取り組めるよう支援したい。
B 女	英語の学習を好んではいるが、間違いを気にして消極的になってしまうこともある。紹介活動を通して自分から進んで英語を使って表現できるよう支援したい。

(3) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証方法
見通し 1	「導入」の過程において、自分の家族や友人、学校の先生等、簡単に表現できる題材を取り上げ、ペアでクイズを取り入れた紹介活動を行うことにより、身近な題材を英語を使って表現することに関心をもち、英語を話してみようとするようになったか。	・自己評価カード ・英文紹介カード ・観察
見通し 2	「思考」の過程において、日ごろ慣れ親しんでいるカバンやペン、授業、給食等、紹介に工夫を要する題材を取り上げ、グループでクイズ活動を取り入れた紹介活動を行うことにより、英語を使って自分の表現や友達の表現をやりとりをする面白さに気づき、英語を使って表現することに意欲をもつようになったか。	・自己評価カード ・英文紹介カード ・観察
見通し 3	「まとめ」の過程において、ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文をグループでスキットにして発表することにより、成就感をもち、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育成できたか。	・自己評価カード ・観察 ・ビデオ

研究の展開

1 題材の考察と目標

題材の考察	本題材は自分たちの学校を外国の学校に紹介するための表現を身に付けることをねらいとして設定されている。まず「導入」の過程で家族や先生、友人等の身近な人物を紹介する表現を学び、「思考」の過程では、学用品や部活動、授業や給食等、身近なものを紹介する表現を学ぶ。「まとめ」の過程では、これらの表現を生かしたスキット作りをして学校紹介をしていく。これらの活動を通して、進んで英語を使って話そうとする態度を育てることができると考える。
目標	身近な題材を紹介する活動に段階的に取り組むことにより、英語を使って表現する喜びを感じ、進んで英語で話そうとすることができるようになる。

2 評価規準

観 点	十分満足な状況	おおむね満足な状況
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	身近な題材を紹介する活動に関心をもちて取り組み、相手の興味を引きつけるように工夫して英語を話そうとしている。	身近な題材を紹介する活動に関心をもちて取り組み、進んで英語を話そうとしている。
表現の能力	身近な題材についての紹介を、ジェスチャーや相手に分かりやすい表現を使って発表することができる。	身近な題材についての紹介を、はっきりとした口調で、発表することができる。
理解の能力	友達の題材についての発表を聞いて、どんなことを言っているのかを正確に理解できる。	友達の題材についての発表を聞いて、どんなことを言っているのかをおおまかに理解できる。
言語や文化についての知識・理解	アメリカやオーストラリアの学校生活と日本の学校生活との違いを文章や表にまとめることができる。	アメリカやオーストラリアの学校生活と日本の学校生活との違いに気づき、箇条書きにまとめることができる。

3 指導計画 (全8時間計画)

過 時 程 間	学習活動 【見通し】	支援及び指導上の留意点	評価項目 【主となる観点】
導 入	1 ・「学校紹介をしよう」という学習の目的、内容を把握し、見通しを立てる。 ・簡単に表現できる身近な人物を選ぶ。	・教師の説明やアメリカやオーストラリアの学校生活の写真を見せることで学習の目的や内容を確認し、今後の学習の見通しを立てるようにする。 ・自分の家族や友人、学校の先生等、日ごろ慣れ親しんでいる身近な人物を例として示すことで題材を選びやすいようにする。	・身近な人物を紹介する活動に進んで取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】 A：表現する身近な人物を選んで選ぶことができる。 B：表現する身近な人物の例を聞いて選ぶことができる。
	2 ・身近な人物を簡単な英文を使って表現し、クイズ活動をペアで交代しながら行う。 【見通し1】 ・紹介に工夫を要する身近な題材を選ぶ。	・「英語基本表現集」を参考にして、「英文紹介カード」に前時に選んだ人物を紹介するためのヒントとなる英文を書くようにする。次にクイズ活動を自己評価カードの項目を意識して、相手に分かりやすく出題するようにする。英語を苦手とする生徒には、スムーズに活動が進むよう個別指導をして適切な助言をしていく。 ・ヒントを言う時には、ジェスチャーを使って表現するよう助言することで、相手が答えやすいようにしていく。 ・生徒が日ごろ慣れ親しんでいる身近なものを例として示すことで題材を選びやすいようにする。	・クイズを楽しみながら、はっきりとした口調で題材の紹介をしている。【表現】 A：表現したいことが2文以上あり、暗唱して言える。 B：表現したいことが1～2文ではっきり言える。 ・友達のクイズを聞いてその内容を理解している。【理解】 A：答えをスムーズに言うことができる。 B：相手の言うことを考えながら答えを言うことができる。
思 考	3 ・グループを決め、紹介に工夫を要する身近な題材を選び、英文を使って表現する。 ・作成した紹介文を使ってクイズ活動をグループで行う。 【見通し2】	・「英語基本表現集」を参考にして「英文紹介カード」に前時に選んだ題材を紹介するためのヒントとなる英文を書くようにする。 ・お互いの参考になる表現を見つけ合うように助言し、グループの中でお互いに教え合いながら行うようにする。	・分かりやすい表現で題材の紹介をしている。【表現】 A：表現したいことが3文以上あり、ヒントの出し方を工夫して相手に伝えている。 B：表現したいことが1～2文で、相手に伝えている。
ま と め	4 ・ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文を使ってグループごとに学校紹介のためのスキット作りをする。	・「先生」「教室」「清掃」「給食」「部活動」「学校生活」というテーマで紹介する時の英文をいくつか紹介することで、スキット作りをしやすいようにしていく。 ・前時まで使った「英文紹介カード」や「英語基本表現集」を活用することで紹介文を構成し、ジェスチャーも効果的に取り入れてスキット作りをしていくよう助言する。	・スキット作りに関心をもって取り組み、グループ内で協力して行っている。 【関心・意欲・態度】 A：スキット作りに進んで取り組み、自らその内容を考えている。 B：友達の考えをもとにスキットの内容を考えている。
	5 ・発表に向けて、グループ内で読み合わせやりハーサルを行う。	・役割を決めて、自分の分担箇所を何度も読ませることで、スムーズに表現できるようにしていく。また、ジェスチャーを使えば相手が分かりやすいということを助言していく。	・ジェスチャーを取り入れる等、相手に分かりやすい表現を工夫しながら、スキットの発表練習に関心をもって取り組み、進んで英語で話そうとしている。【表現】 A：スキットをジェスチャーを取り入れ、自分の言葉として表現している。 B：スキットをスムーズに言える。
	6 ・グループごとに発表をビデオに撮る。 【見通し3】	・紹介する人物に登場してもらったり、紹介する物事の場面を映し出すことで見ている人が分かりやすいものとなるよう配慮する。 ・少々の間違いを気にせずに、表現する喜びを感じながら、進んで話そうとすることが一番大切だということを助言し、楽しんで発表を行う中で、 成就感が得られるようにする。	・海外と日本の学校生活との違いに気づくことができる。【知識・理解】 A：具体的な違いと同じ点について気づくことができる B：具体的な違いについて気づくことができる。
	7 8 ・出来上がったビデオを視聴し合い、アメリカやオーストラリアの学校生活と日本の学校生活との違いを考える。	・声の大きさやアイコンタクト、ジェスチャー等に工夫が見られ、分かりやすい表現になっていたことを賞賛し、今後の学習にさらに意欲が増すようにする。 ・海外の学校の昼食の場面や授業の様子を想起させることで違いをとらえやすいようにしていく。	

評価項目の「A」は「十分満足な状況」を「B」は「おおむね満足な状況」を表す。

研究の結果と考察

- 1 「導入」の過程において、自分の家族や友人、学校の先生等、簡単に表現できる題材を取り上げペアでクイズを取り入れた紹介活動を行うことにより、身近な題材を英語を使って表現することに関心を持ち、英語を話してみようとするようになったか

まず、オーストラリアの学校生活を映したビデオを見せながら、登場する人物の年齢や好み、行っているスポーツ等を教師が簡単な英語で表現する活動を行った。次に、「今度はみんなが、英語で身近な人物を紹介してみよう。」と学習課題を提示し、誰について紹介するのかを考えさせた。その後、「英語基本表現集」を配布し、人物を紹介する表現の確認を行った。

A男は同じクラスの友達を紹介した。ニックネーム、テニスをしているというその友達の特徴を表現したいと考え、資料1の二つの英文を作成した。これまでの授業では、進んで英文を

資料1 【A男が書いた友達を紹介する英文】

His nickname is Wrazi. He plays tennis.

言うことはあまりなかったのだが、今回は指示がなくても、自分が書いた英文を暗唱して相手に話そうとする姿が見られた。

ペアでの紹介活動では、暗唱した英文を笑顔で言っていた。活動後の感想では「本当のクイズみたいでおもしろかった。紹介活動は頭はいつも働いているし、とてもいいと思います。次はもう少し相手を考えさせる英語のヒントを出したい。」と述べた。

B女は数学の先生について紹介した。その先生の特徴を最初はどの表現したらいいのか分からない様子が見られたので、「持っているものや教えている教科を英語で表現してみよう。」と助言すると資料2の二つの英文を作成した。「この表現でサリー(ALT)にも通じるかな。」

資料2 【B女が書いた先生を紹介する英文】

She has a cockroach brooch in her hand.
She teaches math.

と尋ねてきたので「自信を持って大丈夫ですよ。」と言うと、うれしそうな表情を浮かべ、ALTにクイズを出題していた。紹介活動後、B女は「楽しく

できたし、答え方等も分かるので、よいと思う。クイズの方が相手も自分も楽しめるのでよかった。」という感想を述べた。

授業後の自己評価で、「身近な人物を紹介することはどうでしたか。」と質問したところ、14人が「とても楽しかったので、また英語で話してみたい。」、4人が「まあまあ楽しかったので、またやってみたい。」、12人が「少し難しかったが、またやってみたい」、3人が「まあまあ楽しかったが、間違っている英語を話しているのではないか心配だ。」と答えた。

以上により、「導入」の過程において、自分の家族や友人、学校の先生等、簡単に表現できる題材を取り上げ、ペアでクイズを取り入れた紹介活動を行うことにより、身近な題材を英語を使って表現することに関心を持ち、英語を話してみようとするようになったと考える。

- 2 「思考」の過程において、日ごろ慣れ親しんでいるカバンやペン、授業、給食等、紹介に工夫を要する題材を取り上げ、グループでゲーム活動を取り入れた紹介活動を行うことにより、英語を使って自分の表現や友達の表現をやりとりをする面白さに気づき、英語を使って表現することに意欲をもつようになったか

紹介する題材については、「英語基本表現集」の中にある「語彙」を参考にして選ぶよう話した。次に、その題材をクイズの答えとして相手に出題するために、どうヒントを構成すれば面白く出題できるか考えながら、生徒はヒントの文を三つ作った。

A男は何を紹介したらいいのか戸惑っている様子が見られたので、「A男にとって一番身近に感じているものは何ですか。」と尋ねると、少し考えた後、「(自分が所属しているバスケットボール部で使う)体育館。」と答えた。「ではその特徴を表してみよう。」と助言すると、資

料3のヒントの文を考えた。ヒントを書き終わると、すぐに、グループで隣にいた生徒に「できたから聞いて。」と自分で声をかけ、クイズを出題した。第1、第2ヒントに対して"school"や"music room"等、自分が予想していた答えとは別な解答を友達から言われ、意外な表情とともにゲームを楽しんでいる様子が伺えた。第3ヒントに対して"gym"という答えが出ると、うれしそうな笑顔が見られた。A男は感想の中で「友達のいろいろなヒントを聞くと、おもしろく、当ててやる!と思った。」と述べた。また自己評価カードにある質問に対し、資料4のように、自分で項目を付け加えて答えるほど楽しんで表現している様子が伺え、「先生、授業参観でもこれをやりましよう。」と休み時間には言ってきた。

資料3 【A男が書いた体育館を紹介するためのヒントの文】

第1ヒント It has many windows.
第2ヒント It is a sport place.
第3ヒント I can play basketball in it and it has a stove.

資料4 【A男の自己評価 カードの一部】

②身近なものを紹介することはあなたにとって、やさしかったですか、難しかったですか。
ア やさしかったです イ どちらかと言えばやさしかったです ③ みつう
エ どちらかと言えば難しかったです オ 難しかったです ④ たのしかったです ⑤ とてもたのしかったです

B女は資料5のヒントの文を考えた。英文を練習して、言えるようになると進んで友達とクイズを出し合う姿が見られた。第1ヒントに対しては、"racket"や"ball"、"tobibako"等の答えが出て、B子に笑いが見られた。第2ヒントに対して "backnet"や"soccer goal"の答えが出て、"No, no."と言って首を横に振り、その後の第3ヒントで"ground"と正解を得られると"Yes, that's right."と得意そうな表情を浮かべた。B女は「英語でものの紹介をする

資料5 【B子が書いた校庭を紹介するためのヒントの文】

第1ヒント We use it when we study PE lesson.
第2ヒント It is in the outside and it has soccer goal.
第3ヒント We can play baseball here, too.

ためのヒント文がいろいろあって楽しかったし、知らない英語も自然と覚えられたのがうれしかった。学校紹介のスキット作りも楽しみです。」と次の活動への意欲を見せた。

授業後の自己評価では、全体的に「一つのものに対して、友達の発想力が分かっておもしろく、もっと長い時間をかけてやりたかった。」「ふだん分かっているつもりのもので、ヒント文をすぐに作れないものもあった。でもとても楽しく勉強になった。」という感想が多く見られた。

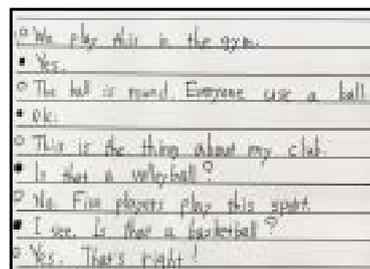
以上により、「思考」の過程において、日ごろ慣れ親しんでいるカバンやペン、授業、給食等、紹介に工夫を要する題材を取り上げ、グループでゲーム活動を取り入れた紹介活動を行うことにより、英語を使って自分の表現や友達の表現をやりとりをする面白さに気づき、英語を使って表現することに意欲をもつようになったと考える。

3 「まとめ」の過程において、ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文をグループでスキットにして発表することにより、成就感をもち、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育成できたか

グループの数は八つあり、構成人数は4～5名である。学校紹介のテーマである「先生」および「教室」は各2グループが担当し、「清掃」「給食」「部活動」「学校生活」は各1グループが担当した。スキットの前半部分には、これまで生徒が取り組んできたクイズ形式での紹介活動を取り入れると作りやすいと助言した。生徒たちはクイズ形式を取り入れた紹介活動に慣れてきており、グループ内で相談し合いながら、とても意欲的にスキット作りを始めた。A男のグループは「部活動」の紹介についてのスキットを発表した。初めに、その部活動が何であるのかのクイズを取り入れたスキットを発表し、次に実際に活動している様子をビデオに収め、

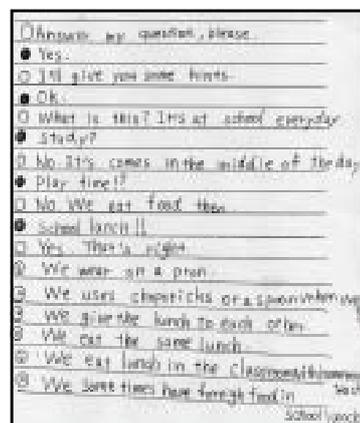
その説明を行った。A男はとてもはきはきと、明るい表情で、資料6のように自分が所属するバスケットボール部を紹介した。「思考」の段階で考えた表現やつなぎ言葉の"I see."を取り入れたり、友人がこれまでの学習で使った表現を参考にしたりしてスキットを作った。発表後、聞く側の生徒から思わず拍手が出ると、満足そうな笑みを浮かべた。授業後の感想には「初めは学校紹介を英語でできるのかなと、不安だったけれど、実際にできると『やった』と思った。英語ではどう表現するのかを考えながらやるのはとてもおもしろかった。」と述べた。

資料6 【A男のスキット】



B女のグループは資料7のように「給食」の紹介についてのスキットを発表した。うまく表現できない場面では「思考」の過程でB女が考えた"when"を使った文を友達に提示し、「"We use chopsticks or a spoon when we eat."という文を使えばうまくいくよ。」と言い、給食についての特徴を説明した。スキットを作ったり、役割分担をする時点からB女は中心的な存在であり、通常の授業ではなかなか見られないような生き生きとした表情をしていた。授業後の感想にも「これ（自分たちの学校紹介）をやってみて、自分たちもやればできるんだと思った。またやってみよう。」と書いた。

資料7 【B女のスキット】



また、他のグループの生徒も生き生きと楽しそうに発表し、自己評価カードに「初めどんなふうに紹介したらいいのか考えてしまったけれど、やっているうちに楽しくなってきた。」「英文を覚えることは大変だけれど、自分の勉強になるし、発表できた時はうれしかった。」と述べていた。

以上により、「まとめ」の過程において、ペアやグループで紹介活動した身近な題材の英文をグループでスキットにして発表することにより、成就感をもち、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育成できたと考える。

研究のまとめと今後の課題

初めに身近な人物、次に身近なものをクイズを取り入れて紹介する活動を行い、最後にこれらの紹介活動を取り入れたスキットを発表したことで、生徒は自然に、楽しみながら英語を話していた。またグループ活動の中では、お互いに教え合いながら、友達の表現に新たな発見をしている場面も見られた。これらの点から、英語を使って積極的に表現しようとする態度が育ったと考える。

紹介文を作成する段階では、「英語基本表現集」を活用したことで、いろいろな表現を知ることができ、紹介活動に必要な英文をうまく表すことができたと考える。未習の単語や文型が使われている場合でも、ジェスチャーを使えば伝わることを実感し、英語を話そうとする態度が大切であるということに気づいたと考える。

生徒が英語を使って積極的に表現しようとするためには、生徒にとって表現したい題材とそれを表現するための基礎的な力が必要であるので、日ごろの授業実践でもその点を考慮して行っていく必要があると考える。

参考文献 ・松本 茂 著 『生徒を変えるコミュニケーション活動』教育出版(2001)
 ・平田 和人著 『中学英語科のリニューアルと授業デザイン』明治図書(2001)

